

和光会会報No. 42

－三菱電サービス（菱サ）～三菱電機ビルテクノサービス（MELTEC）本社OB会－

◆ 第13回総会開催

第13回和光会総会が6月13日（土）15：00から町屋システムプラザB館8階大会議室において73名の会員が出席され盛大に開催されました。

総会に先立ち12年ぶりに希望者を対象にM's station&MICの見学会を開催いたしました。予定は13：30からでしたが、予定より早く来られた方が多く、36名の方を2組に分けて予定を早め、実施しました。M's station説明は前館長の道橋弘昌さんに、MICはMIC統括部長をされた佐々木憲一さんをお願いいたしました。どちらも質問が相次ぎ、予定時間を超えて見学終了。

総会は、定刻の15：00に布施幹事により開会が宣言され同幹事の総合司会により進行されました。昨年同様、幹事を代表して土屋代表幹事より、要旨次の通り開会挨拶がありました。



幹事代表挨拶・土屋幹事

皆さん 今日、は、幹事の土屋です。 昨年のOB会でも若手幹事から挨拶を・・・と云うことで私が挨拶させて頂きましたが、今年もせよとのことで登壇させて頂きました。若いと言いましても私も来年には古希稀なりの年齢になります。S40年入社ですので、丁度今年で入社50年となります。教育センターが産声を上げた年でしたので教育センターも50年の節目を迎えたと思います。3月の和光会幹事会のおりに教育センターの見学機会があり、新しい寮を中心に見学させて頂きましたが、私たちが入社した頃は12畳の畳部屋でした。1年間の教育期間を経て会社生活が始まり、そして職場の先輩の皆さまのご指導ご支援を得て育てて頂き、今日があると思うと、感慨深いものでした。新寮は時代の先端を行く設備をふんだんに取り入れられ素晴らしいものでした。

常に当社の経営の柱に社員教育がある事、そして当社の発展を見学を通じ垣間見た次第です。是非OB会の行事の中で

教育センターの見学機会があればと思った次第です。

さて、今年度OB会は80名弱の参加で昨年より多くの方に参加頂いております。また、新加入の方々も8名居られます。加入を心より歓迎いたします。OB会開催にあたり、本日は教育センターと同様、経営の柱として位置づけられている、安全・衛生・健康の総本山である安全衛生本部より、取締役本部長の村上本部長にご出席 頂いております。ご多忙の中、ご出席心より御礼申し上げます。本会は人事部を始め会社関係者のご支援ご協力があってこそ開催出来ております。人事部より大えきさんにご出席頂いております。御礼申し上げます。我々幹事だけでは開催に漕ぎつけるものではありません。MTBの皆さんのお力添えがなければ開催できません。

本日より新しい支援者も加わって頂いていると聞いております。心より御礼申し上げます。

今日一日楽しい時間を共用頂けます事を祈念し開会の挨拶と致します。

続いて総会議案の審議に入り、事務局の寺門幹事より、配布資料に基づいて下記の報告がありました。

① 第12期事業報告（当日配布資料）

② 第12期会計報告（当日配布資料）

それに基づき、佐藤監事より③ 第12期会計監査報告があり、それぞれ、拍手を持って承認されました。

今年は幹事の改選期にあたり、新幹事の推薦があり、下記の方々が拍手を持って承認されました。

大家昌五・金井敏幸・佐々木憲一(新任)・佐藤貞夫・地頭所惇・篠原徳興・土屋善治・寺門三男・
橋本英雄・原田憲一・布施昌義・松崎啓子・若宮きみ子・渡辺富美子

以上計14名

なお、和光会設立に尽力され、MTBに委託するまで事務局業務に活躍された中島久子さんをはじめ、沼部光雄・東山孝幸・松尾清治・さんの4名の方が退任されました。長い間ご苦労様でした。

次に寺門幹事から第13期事業計画(配布資料参照)が配布資料の通り提案され、多数の拍手を持って承認されました。

最後に次のようなお知らせあり。

①カレンダーの追加・手帳の頒布についての申し込み方法の説明
(すでに6/30に申し込みは締め切りました。)

②MTB和光会の連絡・問い合わせ窓口の変更

続いて布施幹事の司会により懇親会へ！

はじめに会社を代表して取締役村上本部長より来賓ご挨拶がありました。

ご挨拶要旨は下記の通り。



安全衛生本部を担当させて頂いております村上です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

安全衛生本部は、2012年に本部として発足し今年で4年目、システムプラザの8階でオフィススペースの最上階に神棚をお祀りして、日々、業務の安全を祈願しております。

本部の体制は健康相談室の医師1名と保健師2名を含め13名の陣容となっております。本社はコンパクトな組織ですが、支社は、東京、関西に加え、今年から中部も部制に格上げする等、着実に充実が図られており、本社・支社一丸となって業績の礎となる「安全な職場作り」に取り組んでおります。

来賓ご挨拶 取締役村上本部長

1. 当社の業績について

昨年度(2014年度)の受注高は3,257億円、また完成工事高は3,215億円と4年連続の増収となり過去最高となりました。なお、完成工事高の内訳は、昇降機事業が2,121億円、ファシリティ事業が1,094億円でした。

この業績を支えるべく今年度も373名の新入社員を迎えることができ、社員総数9,000名まで後わずかという状況になっております。諸先輩方々の作って来られた歴史に改めて感謝申し上げます。

この約9,000名の社員と協力会社社員の安全管理が私達安全衛生本部にとっての大きな仕事になっております。

2. 安全について

昨年度は、残念ながら多くの災害が発生しました。これは、2014年の厚生労働省統計のレポートにある「建設業の災害が30%近く増加、消費税前の駆け込み需要に伴う生産活動や物流の増加が大きな要因、以降も対前年を上回る傾向、今産業活動が引き続き活発になっていると考えられる」のとおり全国的な傾向と言え、まさに当社も同様の環境にありました。

社員災害も増加しましたが、特に協力会社の災害が、昇降機モダンやファシリティ事業における工事の増加に比例した以上に発生した年でした。

今年度も、経営方針で真っ先に「安全最優先」を掲げており、「リーダーの安全マインドを途切らせる事なく」というスローガンで安全な職場作りに取り組んでおります。

こうした中、今年度も、協力会社の清掃員が膝をついて骨折、掃除機で打撲、空調機点検で転倒、昇降機も新設やモダニゼーション工事にて災害が発生してしまいました。

社員災害では、入社二年目の女性営業担当者が路上で足を捻って骨折、女性社員が事務所で転倒し打撲、屋上防水の現場代理人が屋上で転倒して肉離れ、という災害が5月までに発生してしまいました。

3. 品質について

品質関連指標は改善傾向にあります。特に昇降機は顕著な改善が見えており、まずはモダニゼーションの効果、そして保守・保全、修理を徹底的に実施、その保守技術習得の為に地域テクニカルセンターの開設等、そして教育の充実という、施策展開の効果であると思っております。これら施策の継続でさらに品質が高まっていくものと期待しております。

6月22日には先ほどお話ししました今年度の新入社員373名が現場等へ配属されます。

安全衛生本部では、「教えて育てる安全作業」というタイトルで安全ニュースを作成・配布し、職場に対して新入社員や経験の浅い作業員への気配りや心配りを通して、特に若い人たちの災害防止のお願いをしています。

皆様も駅や町中等で彼らの若々しい作業服姿を見ることがあるかと思いますが、是非、心の中で応援して頂ければ幸いです。

最後に、先ほど報告しました社員災害の後の2事例「転倒による打撲、肉離れ」は、ご高齢の方でした・・・・・・。

つきましては、皆様の益々のご健勝をお祈りして本会でのご挨拶とさせていただきます。

皆様、「ご安全に！」そして「ご健康に！」



乾杯ご発声・中南雅行氏

続いて中南雅行さんの乾杯の音頭で懇親に移りました。

夫々の方の思い出等、懐かしい顔や、思いがけない人との懇談に花が咲きました。

本年度新入会員8名の方のご紹介があり、出席された北本時博さんのご挨拶がありました。

16:15頃から恒例となりましたビンゴゲームが土屋幹事の進行により賑やかに行われました。今年も各本部より寄贈されたノベルティグッズの賞品（ゴルフ関係のものをはじめ、クオカード、図書券、牛革製ブックカバー等々……）をめざして。

ビンゴは全数やらず30数名とし、残りの方は残ったものの中から希望したものを選んで頂きました。毎年少し残るのですが、今年初めて全数なくなりました。



乾 杯 ！

これも恒例となりました『みんなで歌いましょう』のコーナーでは、地頭所幹事の指揮のもと「ふるさと」「翼をください」そして「今日の日はさようなら」を全員で合唱。

最後に沼部幹事の本メで 閉会となりました。

その後C館81・82会議室で全員での記念写真の撮影があり、散会となりました。



みんなで歌いましょう



全員で記念撮影



MIC見学



M' s station 見学



懇親風景



展示コーナー

今年も8階ロビーに会員の作品展示コーナーが設けられ、12名の会員の方から11作品の出品がありました。今回新たに「日本百名山」を完登された中村弘道さんは油絵・日本百名山スケッチ集（記録）水彩画、金井敏幸さんはDIY賞を頂いた日曜大工の模様をA4パネル2枚で紹介。

また、パワーポイントを使ってMELTECの過去と現況（教育センター思斉北・南寮の竣工など）をスライドショーで紹介。

素晴らしい作品（版画、水彩画、竹細工、書道、陶器等）を出展して頂いた方々に深く感謝いたします共にお礼申し上げます。

展示会は来年以降も継続を予定しておりますが、種々な趣味をお持ちの会員も多いと思いますので、作品の出来栄をあまり気にせず、出展していただきたいと思います。

なお、今回展示された作品の紹介は次号以降順次ご紹介をしていく予定です。

趣味の展示コーナー 出展者と作品（敬称略、順不同）

No	氏 名	作品のジャンル	作品名	大きさ・様式
1	金山 幸雄	陶芸	黒泥「兜」	30×30×20
			黒泥「鶏籠型香炉」	30×30×20
			備前焼「花入れ」	30×30×20
2	鈴木 廣行	木版画	雨の浅草寺	74×56
			川越一番街	74×56

3	布施 昌義	日本画	冬の富士	F10号(70×60)	
			新緑の随心院・京都	F6号(60×50)	
4	沼部 光雄	水彩画	永野川の桜	F6号(57×47)	
		日光彫	壁掛け「バラ」	33φ 丸形	
5	笠井 宗男	油絵	新緑の上越路	F8号	
			初夏の湿原	F4号	
		書道 条幅	「絶句」杜甫の詩	180×45	
6	東山 孝幸	水彩画	小樽運河	30号	
			真鶴港ヨットの夏	10号	
			日比谷公園	10号	
			開港記念館	6号	
7	中村 弘道	油絵	初冬の滝沢牧場	F20号(65×77)	
			岳沢湿原(上高地)	F20号(65×77)	
			初秋の富士御庭	F20号(65×77)	
		水彩画	日本百名山スケッチ集(記録)	CD	
8	和田 昭喜	写真	フライ(竹細工)	半紙(横)	
		竹細工	へら鉾竿	穂先	真竹削り穂
				穂持	高野竹
			8尺4本継 【総竹製・漆塗り】	元上	矢竹
				元	矢竹(握り乾漆仕上げ)
9	佐々木憲一	模型	動く昇降機模型((手動運転付き))		
	河原 利昭				
10	小藤 俊雄	木彫刻	阿弥陀如来立像(桧)	50×15×30	
			地藏菩薩立像(桧)	50×15×30	
11	金井 敏幸	日曜大工	爺遊楽庵 ～ 孫と私のあそび場 ～	A4 パネル 2枚	

◆ 「デンデラ野」という文化財

…… (2015-06) —山本 拓弘(馬骨)さんから投稿頂きました—

岩手県の遠野市には、国指定文化財の重要文化的景観地区が二つあります。柳田国男の「遠野物語」に書かれた民話の数々が示すように、山奥での人々の素朴な暮らしが生み出した、日本人の暮らしの一つの原風景ともいえるべきものを、この地を訪ねる度に感ずることができます。遠野の重要文化的景観の一つは、昔より馬の飼育が盛んで、「夏山冬里」方式の飼い方での夏の放牧の共同牧場であった荒川高原牧場であり、もう一つは遠野の中心地に比較的近い土淵集落という所です。荒川高原牧場は、今も現役で、北海道の牧



ダンノハナ付近からの土淵地区辺りの景観。静かな農村の風景が何事もないように広がっていた。この時は5月初旬で、田畑の耕作があちこちで開始されていた。

考えたこともなく、ただカッパを釣るにはキュウリが有効だなどというバカ話を現地で笑い含みで確認しただけでした。

今回の旅では、柳田國男の最大の協力者である地元の佐々木喜善氏の生家のある山口集落を中心に、歩きながらそれらの文化的景観なるものを味わうことにしました。勿論事前に改めて遠野物語をじっくり再読しました。明治の半ば過ぎにまとめられたこの著作は、戦後の時代になってさえも、日本のチベットなどと揶揄された岩手県の山間の人々の暮らしのあり様を彷彿させる、優れた内容だと思います。しかし、それは又、本を読んで想像するだけではなく、実際に現地を訪れない限りは、正確なイメージが浮かばないものでもあると思います。

現代の今では、遠野を訪れても、ほんの少し山奥の地方ということ以外は、全国どこにでもある郊外のショッピングモールがここにもあって、往時を思い起こせるようなものは少ないのです。昔の姿を今に残すことがどれほど難しいかというのを、旅の中で、様々な文化財などを見聞する度に強く感じています。人間の暮らしというのは、常により良いものを目指して進化しており、それが生きものとしての環境適応の本性でもあるのですから、昨日の暮らしを何の工夫も無く今日、明日も続けるというのは、出来そうではなかなかできないことなのです。隣家がTVを買えば、自分も買うぞ、洗濯機が入ったと聞けば、わたしだって、というふうに、人間の本性は止まることなくより安楽な暮らしを指向しています。ましてや、今日のように情報の溢れる社会では、昔をそのままの姿で残してゆくというのは至難のことではないかと思っています。

そのように考えると、重要文化的景観というのは、往時の歴史背景を出来る限り正確にイメージアップ出来る準備をしておかないと、上っ面の理解に止まってしまいます。遠野を知るためには、本当は最低でも半年くらいは現地に足を据えて、付近の集落や山の中を歩き回るなどして、昔の臭いを嗅ぎ出すというような体験が必要なのかもしれません。しかし、研究者でもない自分にはそれは到底無理な話で、文献などをベースに想像力を膨らませて景観を味わうしかありません。そのようなつもりで遠野物語を読み、現地の景観に触れることにしたのでした。

土淵の山口集落は、遠野の駅からは東に位置する六角牛山(ろっこうさん)を超えて釜石方向に向かう笛吹峠を背にした小さな谷あいの集落で、その奥手の方にある水車小屋近くの駐車場に車を置くことにしました。水車小屋の少し下方に佐々木喜善氏の生家があり、又近くには遠野物語にも書かれているダンノハナがあり、ここには佐々木喜善氏の墓もあると聞いています。案内マップでは、近くにデンデラ野というものがあると書かれていました。とにかく、これらの場所を一つずつ見て歩くことにしました。

場とは少し違った雰囲気を感じる事が出来ます。土淵地区には一部観光化してしまった地区もありますが、まだまだ昔を思い出させる景観がたくさん残っています。

東北春の旅に出掛ける前に、今回(2014年)は必ず遠野を訪ねてそれらの重要文化的景観を見てみようと思っていました。今までにも遠野は何回も訪れており、おばあちゃんの語る民話を聴いたり、馬と同居の曲がり屋を覗いたり、或いは民話につながるカッパ淵など、名のある所はそれなりに見ているのですが、この重要文化的景観なる文化財には気づかず、土淵地区の中でも山口という集落には行ったことがありませんでした。

土淵地区には、伝承園や常堅寺やカッパ淵など名の知れた場所があるので、それらを訪ねてはいるのですが、これらを景観という視点からは

まずは水車小屋に行ってみました。昔のままの姿で残っており、水車の臼の機能は、手入れをすれば直ぐにでも稼働させることが出来る様な感じがしました。小屋の中に足踏み脱穀機や唐箕などが置かれていましたが、これらの用具は水車とは何だか不似合いな感じがしました。それでも藁ぶき屋根の小屋は、童謡にもある村の水車という風情が存分に残っている場所でした。

水車小屋を出て少し坂を下ると、左手に佐々木喜善氏の生家がありました。今でも子孫の方が住んでおられるようで、不躰に中を覗く気にはなれませんでした。地区を代表する堂々たる現役の曲がり屋でした。今は瓦葺きの屋根となっていますが、その昔は茅葺きだったに違いありません。そう思うと、100年以上前のこの集落の中での、この家の位置づけのようなものが窺われて、参考になりました。この家の中で、喜善氏は柳田国男と語り合い、近郊の民話や伝承などを集め、書き遺されたのだなと思いました。それにしても、そのきっかけは何だったのだろうか、民俗学云々とは違う意味で興味津々でした。

佐々木喜善氏の生家からほんの少し坂を下ると、左手にデンデラ野への案内板がありました。デンデラ野の話は、何年前かに遠野物語とは別の、知人の情報で知ったのですが、そこが姥捨て伝説につながる棄老伝説の場所であると聞いただけでした。遠野物語の中では、デンデラ野ではなく蓮台野と書かれており、更に次のような説明があります。

「昔は六十を超えたる老人はすべてこの蓮台野に追^や遣^はるの習いありき。老人はいたずらに死んで^{しま}うこともなら

ぬ故に、日中は里へ下り農作して口を糊したり。そのために今も山口土淵辺にては朝^{あした}に野らに出づるをハカダチといい、夕方野らより帰ることをハカアガリというといえり。」



橋を渡ってすぐ先に、デンデラ野への入口の坂道があった。



山口川に架かる高室橋に取り付けられたレリーフ。老いた母を背負っている子は、親孝行のためではなく、この橋を渡って母を捨てに行くのである。

少し行くと小さな川があり、そこに橋が架かっていました。山口川、高室橋とあり、その表示の上に小さな親を背負ったその子と思しき大人の像が貼り付けられていました。どうやら還暦を過ぎた自分の親を、この橋を渡ってデンデラ野に送って行く姿をイメージしての像のようでした。早い話が、親をおんぶして捨てに行くという姿なのです。山口川に架かるこの橋が、老人にとってのあの世への入口といった按配でしょうか。深沢七郎著の檜山節考のイメージと重なるものがあります。棄老伝説は大昔の貧しい時代には、この国のあちこちに潜んでいた本当の話なのかもしれません。デンデラ野というのはいくつもの様な場所なのであろうと、複雑な思いは一層膨らみました。

高室橋を渡って直ぐ先の左手にデンデラ野に向かう小さな坂道があり、そこを50mほど歩くと、小さな野球場ほどの草原がありました。その端の方に草ぶきの小さな円形の掘っ立て小屋が作られていました。どうやらその掘っ立て小屋を含めたこの草原がデンデラ野というものらしいのです。あの掘っ立て小屋が、老人たちが共同生活を強いられた場所のようです。



デンデラ野とあがりの家の景観。デンデラ野と呼ばれる草叢は2反歩（＝600坪）ほどの広さであろうか。往時がどのような状況だったのかを想像するのは難しいが、草原はこれほど刈り込まれてはいなかったのだと思う。

形に並べて作られているだけで、寝床などは何も見当たりませんでした。恐らくその昔は、木製のベンチなど無かったでしょうから、老人は地べたに藁などを敷いて囲炉裏で暖を取りながら、そのまま眠りに就くという毎日だったに違いありません。小さな集落にはそれほど多くの老人がいたとも思えず、恐らく2～3人で身を寄せ合って暮しながら最後の時が来るのを待っていたのではないかと思います。人間が年老



あがりの家の内部の様子。このような土間の、たった一部屋の掘立小屋の中で、還暦を過ぎて働き手から見放された老人は、あの世からのお迎えが来るまで共同生活をしなければならなかったという。

いまに、独りで最期を迎えるというのは、デンデラ野での共同生活よりもより厳しいように思えます。また、我が身の処理が自身で出来ない状態となった時、今までの暮らしの場で最期を迎えることなど叶はずもなく、見知らぬ老人ホームやグループホームという名の現代的デンデラ野に行かざるを得なくなるのは必定であり、それはもしかしたらデンデラ野以上に厳しく悲しい人生の終末期となるのかも知れません。

そう思いながらそこへ近づいて中を覗くと、「あがりの家」と書かれた木の札が掛かっていました。その意味は良く解りませんが、遠野物語の「ハカアガリ」という文語から想像すると、老人たちが農事から上がって集う家という様な意味なのかもしれません。しかし、「アガリ」ということばには、「戻る」という意味の他に、「出来上がり」「一丁上がり」というように「終わる」という意味があって、此処は老人となつての人生の終わりの場所であり、あの世への旅立ちの場所という様な意味が込められ名づけられているに違いな

いと思い、何ということかと思いました。

あがりの家の中は、まん中に石で囲った囲炉裏がつくられ、鉤吊るし（＝自在鉤）に鍋や鉄瓶などを掛けられるようになっていましたが、それ以外には囲炉裏を囲んで木製の腰掛が円

い生きて生きるといふことの残酷さを、これほど想わせる景色は無いと思い知らされたのでした。

今の時代、高齢者世代はこのあがりの家のことをどう受け止めるべきなのでしょう。65歳以上の老人が全人口の四分の一を占めようとしている今、もしあがりの家のようなものがあつたとしたら、この世は一体どうなるのでしょうか。老人には想像もできない、恐ろしい世界が現出しているに違いありません。幸いなことに、今のところ現代社会には、棄老伝説などの入り込む余地はないようです。

しかし、それは本当なのでしょうか。あがり

の家に住んでいた老人たちよりも、今それ以上の生き甲斐を感じながら老の日々を果たして送れているのでしょうか。大いなる疑問が湧き上がります。例えば「孤独死」という哀しい人生の終焉がありますが、身内との連絡もとれな

認知症という恐ろしい病がありますが、今の世に、己が生きていることの自覚さえも病に奪われた状態のままで、生き続けるというのは、デンデラ野のあがりの家に追い遣られた者が、哀しみを通り越して諦めの宿命を噛みしめながら生きているよりも層倍の悲惨さの中にあるようにも思えるのです。死に時を自ら選ぶこともできず、徒(いたづら)に生き続けるというのは、真に哀しいことではないかと思うのです。

デンデラ野の掘っ立て小屋を後にしながら、思いは一層複雑となりました。ここに来てこの景観を見ている自分も家内も、もし往時だったなら、あの掘っ立て小屋の中に横たわって、元気な時はハカダチとハカアガリを繰り返しながら、あの世からのお迎えを待っている世代に入っているのです。デンデラ野は、老人がどう生きて死を迎えるかについて、これから先もずっとその時代に生きる人々に課題を与え続けるに違いないと思ったのでした。〔東北春の旅から・遠野のデンデラ野を訪ねて〕（2014年6月記）

◆ 新入会員紹介

第12回総会後入会された方は下記の方々8名で、第13回総会にてご紹介しましたが、当日欠席された方もおりましたので改めてご紹介いたします。



木瀬 吉昭さん

この度、和光会に入会いたしました木瀬吉昭です。

3年程前に総会に会社代表（当時ファシリティ事業本部長）として出席させて頂きましたので、お見知りおき頂いている方もいらっしゃるかと思います。

現在は、本年4月より（株）菱サ・ビルウエアの社長に就任（転籍）しており、池袋に通勤の毎日です。

時間的余裕ができるのは今暫く先になりますが、できる限り会に参加していきたいと思いますので、よろしくお願い致します。



北本 時博さん

昭和48年入社、東京支店中央営業所配属、入社以来営業畑一筋です。東関東支社長、関越支社長、横浜支社長を経て顧問になり、初めて本社勤務になりました。本社は縁がないと思っておりましたが、最後にご縁があったようです。それで和光会に入れて頂きました。

これからは、皆様とご一緒に楽しく過ごして参りたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

小泉 俊一さん

昭和51年4月入社。広島支店（現中国支社）配属。本社、東京支社、中国支社、中部支社に勤務。

平成27年3月退社。

現在トーコービルシステム勤務。



嶋津 晃さん

2015年4月1日付けのメルテック・ビジネス（株）へ転籍し、和光会に入会させていただきました昭和55年入社の嶋津です。

今後は、皆様のご指導を仰ぎ会の一員としてお手伝いさせていただきたいと思っております。

また、この入会を機にいままでの仕事に加え、家庭や地域などとの関係、趣味の充実など、諸先輩方の有意義な活動を参考にさせていただき、じっくりとセカンドステージのプランを検討していきたいと思っております。



清水 啓市さん

昭和49年(1951年)大量採用の残党の一人、清水啓市です。本年3月東京メルテック(株)退任を機に和光会に入会させていただく事になりました。多くの方から退職後の生活設計を質問されますが、現場リスクを抱えてきたストレスからの開放にえも言われぬ安堵に浸っているところであり、今は「仕事にはもう就かない」を主義に日々を過ごしています。趣味の中で変わったところとしては女性ジャズミュージシャンのライブ撮影があり、CDジャケットやフライヤー、HP用に撮影依頼も増えてきました。夜な夜な重たいカメラを片手にライブバーのカウンターでグラスを傾けています。

竹村 知美(旧姓：澤)さん

平成10年6月入社。本社総務部に勤務。

平成14年12月退社。



東京消防庁災害時支援ボランティア
ユニホームです

中島 征夫さん

旧技術本部や現エンジニアリング本部に所属していました中島征夫と申します。

私は防災機器メーカーの在籍が長かったのですが、監理技術者資格絡みで転籍し、1998年4月から2015年3月までの17年間の歳月が経過しました。在籍期間が多くの方の皆様の半分にも満たない17年間で大変短く、和光会の案内を事務局の方から頂いたときに、この在籍年数では会員にはなれないのでは？準会員程度では？とお聞きしたのですが、「問題はありません」とのことでしたので、恐れながら会員申込みさせていただきました。退職後、4カ月近くが経過しましたが、この間、例年7月に教育センターで開催の消防設備技術研修の支援や、教育センターの研修用教材の整備等の支援をさせていただきました。

他に東京消防庁災害時支援ボランティア活動をやっています。これは、震災時、大規模災害時、大規模自

然災害時に消防活動支援を行うもので、定期的に、応急救護活動、消火活動、救助活動などについて訓練をしています。6月は土砂災害対応訓練、総合水防訓練等を実施しました。

末永いお付き合いをよろしくお願い申し上げます。

姫野 廣さん

昭和48年4月入社。本社工事部配属。本社昇降機本部、九州支社福岡営業所・西九州営業所、本社マーケティング本部・営業本部に勤務。

平成27年3月退社。

◆ 訃報ご報告

E-MAIL 会員各位へは INFORMATION No.127でご連絡申し上げましたが、会員で取締役人事部長や総合生産・技術センター所長等を歴任された篠崎 健彦氏が4月4日 ご逝去（享年96）されました。

改めてここに哀悼の意を表し、謹んでご報告申し上げます。

故篠崎 健彦氏は昭和32年3月に入社され、本社冷凍機課、昭和40年2月 本社業務部冷凍機課 課長、昭和43年9月 広島営業所 所長その後広島支店 支店長、昭和46年6月 本社人事部 次長等を歴任され、昭和50年5月本社取締役 人事部長に就任されました。昭和54年8月本社 取締役総合生産・技術センター所長、監査役、顧問を経て昭和62年6月退任されました。

◆ MELTEC 情報

○ 2015年4月1日現在 MELTEC データ（社員数・事業所以外は2015年3月31日現在）

- ・社員数 8,949名（役員、出向(受)を除く）
- ・事業所数 本社ほか 計276カ所
- ・昇降機保守契約台数（全機種） 244.6千台
- ・冷熱保守契約台数 420千台
- ・遠隔監視サービス（メルセントリー）件数 20千件
- ・ビル設備保守件数 30.2千件

◆ 事務局より

- ・ 第13回目の総会も大変盛り上がり、無事終了いたしました。
今回もいつものように各事業本部よりノベルティグッズをご提供くださいました。
- ・ 和光会会報No.34より「くるま旅くらし心得帖」の山本拓弘氏よりくるま旅について投稿いただいておりますが、今回も投稿いただきました。

なお、山本拓弘氏の「くるま旅くらし」の最近の様子は下記ブログに載っておりますので是非ご覧ください。

<http://blog.goo.ne.jp/vacotsu8855>

「山本馬骨」で検索しても可能です。

- ・ カレンダーの追加・手帳の頒布については和光会会報No.41でお知らせしたように、カレンダーの追加・手帳の頒布を2016年分から有償申し込みを受け付けることにし、和光会会報No.41ではゆうちょ銀行の振込用紙を同封する予定でしたが、町屋郵便局には在庫が少ないため同封できませんでした。ご迷惑をおかけいたしまして誠に申し訳ありませんでした。

- ・ 和光会の連絡・問い合わせ窓口について

第6期より会社（人事部）が和光会を全面的に支援して下さることになり、OB会事務作業（会員との連絡・通知、1194・カレンダーの送付等）を人事部の委託によりMTBにお手伝いいただき、MTBの担当は総務・人事支援部（部長：武田 修）で変わりありませんが、第13期より連絡・問い合わせ窓口は下記のとおり変更になりました。

担当：木村 律子BD、佐々木 敏行、野原 菜穂

電話：03-3803-8865（代表）

FAX：03-3803-8875

E-mail：meltec-OB-wakokai@mtb.ssg.meltec.co.jp

- ・ 住所変更等通常の連絡・問い合わせはMTBの上記和光会担当か、和光会事務局（寺門）で済むと思いますが、会社の人事部の窓口は年金・基金を担当している方で次の通りです。

担当：大嶧 勝則 SK

電話：03-5810-5392（ダイヤルイン）

FAX：03-5810-5501

E-mail：oheki.katsunori@meltec.co.jp

- ・ 2015年度会費納入対象の方は2003年（創立時）、2006年、2009年および2012年に入会された方々になります。対象者宛に先回「1194」「和光会会報」送付時振込用紙を同封いたしましたが、会費「4,000円（2年分）」の振り込みが未だの方は次の口座宛振り込み賜りたくよろしくお願い申し上げます。

会費振込先：ゆうちょ銀行

〔記号〕 00100-7

〔番号〕 650896

〔加入者名〕 和光会

- ・ E-MAIL 会員各位へは INFORMATION をお送りしておりますが、最近不達が増えておりますので、**メールアドレスの変更時は速やかにご連絡**をお願いいたします。
- ・ 「和光会会報」・「1194」・カレンダーなどを会員宛送付しておりますが、宛所不在で戻ってくる場合がありますので、**転居・住所表示変更等の場合は速やかにご連絡**をお願いいたします。
- ・ パソコンのある方は、会報や総会写真を下記和光会ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。
<http://www.geocities.co.jp/Milkyway-Kaigan/5992/>

皆様の日頃の活動やグループ活動などのお便り・投稿をよろしくお願いいたします。

2015-8-2 和光会事務局 寺門 三男

029-872-4122 mitsuotera@jcom.home.ne.jp